

<論文>

## 沖縄県の仏教寺院の活動状況 —信者に対する精神的支援を中心にして—

松浦光和

### I. 目的

都道府県別の人口（平成27年国政調査）と寺院数（文化庁：平成27年12月31日現在の「全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数」より）から「1寺院当たりの都道府県人口」（以降で「1寺院人口」とする）を算出し、さらに1寺院人口を大きい順に並べてみると、沖縄県が16871人で最も多く、滋賀県が440人で最も少ない。全国平均は1644人で、中央値（大きさ順にならべて中間になる数値： $47 \text{ 都道府県} \div 2 + 0.5 = 24$ ）に位置するのは24番目の静岡県で、1401人である（表1）。ここから、沖縄県の1寺院人口は全国平均の10倍強であり、中央値の12倍強であることが分かる。他方、滋賀県は全国平均の0.27倍弱であり、中央値の0.32倍弱である。また、沖縄県は滋賀県の38倍（16871人：440人）である。

沖縄県の仏教寺院（以下、寺院）の特徴は檀家を持たないことである。これについて、川上（2017）は、江戸時代の日本では、「お寺」を行政の末端代わりに位置づけて、どの家庭も必ず仏教の宗派に入るように義務づけた「檀家制度」を敷いたので、子どもが生まれたり、家族が亡くなったりしたら、必ず近くのお寺に届け出て、そのお寺の「宗門人別帳」に登録され、そのお寺を菩提寺としたが、当時の沖縄は「琉球王国」で、江戸幕府の幕藩体制の中に入ってなく、薩摩藩が侵入してからも、表面的には「独立国」の様相を保ったので、檀家制度は敷かれなかった、と説明している。

江戸幕府がなくなり明治政府が誕生した後も、沖縄県以外では「檀家制度」が習慣として残って「檀家」が存在するが、沖縄県では檀家制度がなかったため、今でも檀家はない。

今回は、過去に檀家制度がなく、その習慣もない沖縄県の寺院の活動状況、就中、地域の人々への精神的な支援について調査する。

表 1. 都道府県人口と寺院数

都道府県	総人口（単位1000人）	寺院	1寺院あたりの人口	順位
全国平均	<b>127,095</b>	<b>77,316</b>	<b>1,644</b>	
沖縄県	<b>1,434</b>	<b>85</b>	<b>16,871</b>	<b>1</b>
神奈川県	9,126	1,897	4,811	2
東京都	13,515	2,889	4,678	3
鹿児島県	1,648	488	3,377	4
埼玉県	7,267	2,261	3,214	5
宮崎県	1,104	350	3,154	6
青森県	1,308	477	2,742	7
大阪府	8,839	3,395	2,604	8
宮城県	2,334	946	2,467	9
北海道	5,382	2,342	2,298	10
茨城県	2,917	1,298	2,247	11
福岡県	5,102	2,380	2,144	12
千葉県	6,223	3,015	2,064	13
岩手県	1,280	629	2,035	14
栃木県	1,974	993	1,988	15
高知県	728	371	1,962	16
長崎県	1,377	738	1,866	17
兵庫県	5,535	3,286	1,684	18
広島県	2,844	1,727	1,647	19
群馬県	1,973	1,211	1,629	20
愛知県	7,483	4,596	1,628	21
秋田県	1,023	682	1,500	22
熊本県	1,786	1,205	1,482	23
静岡県	<b>3,700</b>	<b>2,641</b>	<b>1,401</b>	<b>24</b>
岡山県	1,922	1,403	1,370	25
長野県	2,099	1,571	1,336	26
愛媛県	1,385	1,084	1,278	27
福島県	1,914	1,539	1,244	28
鳥取県	573	467	1,227	29
徳島県	756	632	1,196	30
香川県	976	876	1,114	31
山口県	1,405	1,436	978	32
大分県	1,166	1,245	937	33
岐阜県	2,032	2,276	893	34
京都府	2,610	3,074	849	35
石川県	1,154	1,372	841	36
新潟県	2,304	2,796	824	37
三重県	1,816	2,357	770	38
佐賀県	833	1,088	766	39
山形県	1,124	1,486	756	40
奈良県	1,364	1,818	750	41
富山県	1,066	1,588	671	42
和歌山県	964	1,594	605	43
山梨県	835	1,503	556	44
鳥根県	694	1,309	530	45
福井県	787	1,685	467	46
滋賀県	<b>1,413</b>	<b>3,215</b>	<b>440</b>	<b>47</b>

寺院数：平成27年12月31日現在の「全国社寺教会等宗教団体・教師・信者数」（文化庁）  
 人口：「平成27年国勢調査」

## Ⅱ. 方法

時期：2017年11月。

調査対象：沖縄県中部（那覇市・浦添市・宜野湾市・沖縄市）の6寺院。

記録：住職と住職の家族にインタビューを行った。

## Ⅲ. 結果

### 1. 全体を通して

沖縄県では、納骨する場所として寺院内の納骨堂を選ぶ場合も多く見られるが、納骨堂を利用している人々と、寺院に出入りする人々を今回調査に応じた住職と住職の家族は「信者」と呼んでいた。沖縄県には前述した様に檀家はなく、寺院に関係する外部人を信者と呼ぶのが一般的だと考えられる。

一概には言えないが、沖縄県以外の都道府県（以下で「本土」とする場合がある）では、それぞれの家族と寺院が関係を結び、家族は特定の寺院に葬儀・法要の仏事を頼むことが多いが、今回調査した沖縄県の寺院では家族ではなく、個人が寺院と関係を結ぶこともあり、祖父と祖母の葬祭を司る寺院が別々であったり、宗派が別々の場合もある。

個人が、どの寺院を信頼するか、あるいは親近感を持つかで、寺院との関係が規定される。さらに個人は寺院を替えることも可能である。寺院活動によって信者は増減し信者獲得は自由競争になっている。

沖縄県の寺院が極端に少ないことをインタビュー開始時に述べて、その理由を尋ねたが、王朝時代は寺院が王家・武士など特定の人々のために存在し、庶民とは距離があったので少ないという意見が多かった。

寺院数について、前掲の川上（2017）は、17世紀前半成立の「琉球神道記」では41寺が確認でき、1713年成立の「琉球国由来記」では45寺としている。さらに、寺院は首里城周辺と那覇港近辺に集中していると述べている。すなわち、寺院は数が少なく、地域も限定されていたのである。しかし、明治になって王朝からの庇護がなくなり多くが廃寺になった。1902（明治35）年、琉球新報は「僧侶は、真言宗10人、臨済宗6人、真宗4人」とし、寺院数が激減したことを記している。

つまり、明治時代に琉球王朝がなくなり寺院運営が困難になり廃寺になったケースが多いが、長い時間を経て県民への仏教布教が再び活発になり現在に至っているのである。

## 2. 各寺院について

今回は6寺院を調査したが、その中の2寺院は戦後に建立されたが、他の4寺院は琉球王朝時代に建立され、明治時代の困窮を経て今に至っている。

### 2-1. 新しい寺院

ここでは、戦後建立の2寺院について述べる。

①金剛寺（沖縄市） 高野山真言宗の寺院。住職（比嘉真璋氏）の母方の祖父が1957（昭和32）年に建立した。先代（祖父）の頃は信者が多かったが、先代が亡くなり無住寺になり信者が離れ、信者数は最盛期の3分の1になったので、現住職が跡を継いだ。住職は一般の家で生まれ、高校までは普通の高校で学んだが、先代が建立した寺院を継いで発展させたいと考えて、宗派の大学で学び、卒業後に僧侶になるために専修学校に進んだ。以後22年間僧侶として活動しているのは仏教を広めたいと考えているからである。

先代が亡くなり無住となった期間が長かったので、納骨堂の遺骨の家族が不明であったり、探しに来ることもあるという。



写真1 金剛寺に隣接する拝所

住職は葬式や法事で信者と接し、信者の相談に応じて精神的支援に努めている。

ユタに依存する年配者は多いが、亡くなった人の魂の在り方についてはユタの説明が納得しやすいからではないかと住職は述べている。住職はユタとの共存をはかりながら布教したいと考えている。

寺院は小高い丘の上にあり、寺院へ通じる階段があるが、この階段の左側に「拝所（うがんじゅ）」がある。住職は市の調査を通してノロの墓だと考えている。ここは、戦前から「聖地」とされてきた。この聖地に隣接して先代が寺院を建てたのである。琉球王朝の頃に、公務のシャーマンであったノロは、仏教とは立場が異なった存在であるが、王朝時代には両者が協力したこともあり両者は無縁ではない。今、こうしてノロの墓と仏教寺院が共に存在することに住職は意義を感じている。グローバルな空域でもある。

住職は、これからは若い人に仏教が広まっていく可能性があるので、布教するためには駐車場を併設出来る広い土地に寺院を移動させる方が良いが、聖地にある寺院の意義を考えると決断出来ないと述べている。

写真1はノロの墓と伝わる拝所（うがんじゅ）である。この上に寺院がある。

②常幸寺（浦添市）浄土宗の寺院。住職（島袋幸雅氏）が1997(平成9)年に開山した新しい寺院である。住職は沖縄で生まれて小学生の時に横浜に移住し、1945（昭和20）年に所沢陸軍航空学校在学中に少年飛行兵として17歳で終戦を迎えた。その後、警官、教員を経て琉球検察庁に検察事務官として勤務したが、勤務の間に浄土宗教師資格を取得して僧侶となり、1987（昭和62）年にこの寺院を建立した。開山は稀なことであるという。



写真2 常幸寺の本堂

僧侶となった動機は、人間の生活には悲しいことが多いので、それを支援したかったと述べている。実際に支援を始めると、まわりの人々が喜んでくれ、その人達から勧めもあり布教所を設置し、さらに寺院を建立した。

住職には昔からの慣習に悩む人達に会ってきたが、住職は地域の文化を尊重しながらも、人々が悲しまない様に支援することを第一に考えて、共に生きてきたと述べている。

この寺院では、家族皆が寺院の仕事に従事している。住職と副住職（息子）は葬儀や法事に従事し、住職の妻と2人の娘は本堂に来る信者達の悩みを聴くことが仕事になっている。信者は遺骨を預けている人々や地域の人々である。信者は、自分なりの答えを持って訪ねてくることが多いが迷いも持っているので、アドバイスではなく、その人達の話の聴くようにしている。

写真2は、本堂内部である。本堂は二階にあり納骨堂を併設する。1階は庫裏（住居）である。

## 2-2. 王朝時代からの寺院

ここでは、琉球王朝時代に建立された4寺院について述べる。

①臨海寺（那覇市） 宗派は東寺真言宗。1459年以前の創建。長い間、航海の安全祈願のた



写真3 臨海寺の鐘楼

めの参拝が多かった。旧寺院は沖縄戦で焼失したが、1967年に現在の地に再建された。住職(糸教真清氏)は、先代から継承。

現在、他の寺院と共同で「般若の会」を立ち上げて布教活動(法話会)を行っている。法話会を月に2回、市内の大きな書店で実施しているが、この会員にはカトリックの神父、精神科医もいて、門戸が広く開けられている。また寺院を訪れる人々への精神的な支援の一環として安心感を持ってもらえる様に純日本風の寺院と鐘楼を建立した。そのために寺院専門の大工職を本土から招いて近くに住んでもらい寺院の維持管理を行っている。この寺院の梵鐘のオリジナル(1459年制作)は県立博物館に保管されているが、寺院では新しい鐘楼を建てて、そこにオリジナルを模した梵鐘を釣っている。また、同じ趣旨で日本風の庭も造り、信者に公開している。

写真3は鐘楼である。オリジナルをモデルにしており、信者が大晦日に鐘をつくことが出来る様にしてある。

②神宮寺(宜野湾市) 宗派は東寺真言宗。1458年中城(なかぐすく)城主の護佐丸(ごさまる)の菩提をともらう為、あるいは1459年に住民の祈願所として建立されたという二つの口伝がある。

住職(金城良啓氏)は、先代から継承。住職によると、以前は夏祭りなどで寺院が地域の中心であったが、今は人々の仏教(寺院)離れが起きているので、布教活動が必要と考えた。そこで「お寺を身近に感じてほしい」と思いカルチャースクールの講師をしている。また、地元の子FM局から仏教の教を発信している。ここではざっくばらんな仏教の話をしている。



写真4 神宮寺の寺門

さらに、3年ほど前に「信者の会」を立ち上げた。この結果、那覇方面からも来る人が多くなった。

また、以前より檀家制度はないが、それを問題とは考えないで、寧ろ檀家制度がなかったことで、寺院が自由に活動出来るのではないかと、と考えている。

写真4は寺門。昔からの風情を保っている。

③盛光寺（那覇市） 宗派は臨済宗妙心寺派。大凡 1722年に建立。1892年に現在地に再建。住職（上江洲瑞雲氏）は、先代から継承。布教活動として、短時間の座禅会を行っているが人々が仏教に接することが出来る様に月に1回の法話会も行っている。住職は仕事の傍らで大学院で学んでおり、研究にも従事している。

寺院は、住民や信者に開放されており人々が集って仏教行事の準備をしている。ここがコミュニケーションの場になっていることを住職は歓迎していて、積極的に開放している。

写真5は、本堂で仏事の準備をする人達である。この日は雨天であったが、人々はここに集まって準備をしていた。



写真5 盛光寺の内で活動する人々

④万松院(那覇市) 宗派は臨済宗妙心寺派。1613年に隠居寺として建立。住職(松久宗清氏)は、先代家族から継承。教活動は、「信徒の会(花園会)」で仏の教えを伝え、参禅会を土曜日に行っているが、希望者があれば日曜日でも行う。先祖供養について悩む人がいるので、相談に応じている。さらに仏教についての本を出版している。明治の頃から、この寺院を「うがんじゅ」として捉える人々がいて、今でも拝みに来る人がいるということである。

写真6は寺院の内部である。



写真6 万松院の本堂

#### IV 考 察

沖縄県は、歴史的な経緯によって47都道府県の中では唯一檀家制度を経験していない県である。

本土では寺院と檀家が歴史的な経緯の中で結びついていることが多く、関係する寺院を替えることは、これまでは少なかったと考えられる。一方、沖縄県では人々は自由に寺院を替えることが可能である。この状況がある住職は、資本主義的な自由市場(しじょう)と同じだと述べている。この結果、寺院は共通項として葬儀・法事を行うが、さらに独自の活動をすることによって、多くの信者を得ることが可能になる。

檀家がない沖縄県においては寺院が競合し、人々は自分にとって好ましい寺院を選択できるので、両者の関係が今後の沖縄県の仏教活動をより活発化すると考えられる。

### 謝辞

今回の調査に当たり、調査対象となる寺院を地域・宗派に偏らないように検討し、全ての調査に同行して下さいました琉球大学名誉教授の中村完先生に心より御礼申し上げます。

また調査に応じて下さいましたご住職方にも感謝致します。

### 引用文献

川上正孝 2017 沖縄は仏教王国だったかー仏教はなぜ定着しなかったのかー新星出版

### 参考文献

新星出版 2017 月刊「オキナワグラフ」2017年12月号

沖縄県仏教会 1987 沖縄県仏教会加盟寺院案内

(2018年4月20日受領、2018年5月29日受理)

(Received April 20, 2018; Accepted May 29, 2018)

## **The Activities of Buddhist Temples in Okinawa —Focusing Supports for Believers—**

Matsuura MITSUKAZU

Okinawa Prefecture has as many as 1,434,000 inhabitants and 85 Buddhist temples. This means 16871 inhabitants per temple. This number is the biggest among 47 prefectures. This project aims to study how these temples give moral support. In the Edo period in Japan, except for the Okinawa area, Japanese people kept the Danka system. Under this system, people were forced to be united with temples legally. Now, in Japan, this system remains and people have relationships for Buddhist memorial services and funerals with temples. However, in Okinawa, people don't have the system and can choose temples freely. Thus, enhancing confidential relationships between them directly link to increasing religious believers.

Each temple in Okinawa strives to attract many believers. The temples missionize via building and keeping more Japanese style temples, holding Zen sitting meditation and preaching seminars, culture schools and broadcasting from mini FM radio stations. There is a temple master who founds temples and missionizes. We also interviewed a temple master. He inherits core ideas from the founder who built a temple on holy place.

